

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

静永, 健
九州大学大学院人文科学研究院文学部門

<https://doi.org/10.15017/25161>

出版情報 : 文學研究. 109, pp.1-19, 2012-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

文学研究 第109輯 抜刷
平成24年3月1日 発行

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

静 永 健

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

静 永 健

(華譯・九州大学専門研究員 陳独)

1. 9～10世紀：初渡《杜甫詩集》の痕跡

日本に《杜甫詩集》が渡来したことが確認される最も古い資料は留学僧円仁（794～864）の書籍目録である。彼が開成三年から翌四年（838～839）にかけて揚州滞在中に入手した書籍の中に「杜員外集二卷」とある。この卷子本はもちろん現存しないが、おそらく潤州刺史樊晃（彼の潤州在任は大暦5～6年頃、即ち770～771）が編集した「杜工部小集六卷」の系統に属する抄本であった可能性が高い。私たちはその早さに驚くばかりである。

続いて10世紀には日本・平安時代中期の文人大江維時（888～963）が撰した唐詩の摘句集『千載佳句』に、以下のように六聯の杜甫詩句を見いだすことができる。

秦城樓閣鶯花裏、漢主山河錦繡中。〔清明〕
林花着雨燕脂落、水荇牽風翠帶長。〔曲江遇雨〕
藍水遠從千澗落、玉山高對兩峯寒。〔（九日）藍田崔氏莊〕
五夜漏聲催曉箭、九天春色醉仙桃。〔早朝大明宮〕
魚吹細浪搖歌扇、燕蹴飛花落舞筵。〔城西（陂）泛舟〕
數莖白髮那拋得、百罰深盃也不辭。〔陪陽傅賀蘭長史會樂遊原〕

以上の杜詩句および詩題には、例えば最後の第六句目の題が今日の通行本では皆「樂遊園歌」に作るように、幾つかの著しい異同がある。これらは現存する《杜甫詩集》の最古の版本である北宋・王洙の編集したものよりも更

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

に古いテキストに拠った可能性があり、貴重である。この他にも維時の後裔である大江匡房（1041～1111）の言行録である『江談抄』に「注杜工部集」への言及があるなど、平安時代の日本には既に杜甫の詩がある程度紹介されていたようである。

しかしこの頃の日本における詩人杜甫の認知度は低く、数多くの唐詩人の一人として扱われているに過ぎない。彼の詩歌のみが特別に取り上げられ、鑑賞されることはなかったのである。また、これらの唐詩に関心を持っていた読者層も、平安京に在住する極めて少数の貴族文人に限られていた。従って、平安時代の日本に伝わった《杜甫詩集》は、その後次第に忘れ去られ、王洙本以降の中国の版本との字句異同が問題化することもなかった。このことは、同じく唐抄本が日本に伝来し、今日も多くの写本が残る白居易『白氏文集』とは全く異なる現象である。即ち、日本に伝来した初期の《杜甫詩集》は、平安貴族文化の衰微とともに消え去っていったのである。

2. 14～15世紀：再渡《杜甫詩集》と五山禪林

杜甫の詩が再び日本で読まれるようになるのは、中国の元朝から明代初期にかけての頃である。日本の朝代で言えば、鎌倉時代末期から室町時代に当たる。

この時期、杜甫の詩を読み始めたのは禅僧、取りわけ京都の代表的禅宗寺院「五山」の僧侶たちである。彼らは中国の詩僧と同様に仏道修行のかたわらに詩歌も諷詠し、またそのような文会を通じて、一般の文人墨客とも交わった。彼らは禅僧としての独特の視点から中国の詩文に関心を持っており、折りに触れてその解釈を講義したのだが、現在残されているのは、それを傍聴した弟子たちが書きとどめた口述記録である。虎関師錬（1278～1346）の詩文集『済北集』二十巻のうちの第十一巻に収録される『虎関詩話』には、「登岳陽樓」「已上人茅齋」「別贊上人」「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻」の四首の杜詩についての解釈が見える。他に江西龍派（1375～1446）の『杜詩統翠抄』、雪嶺永瑾（1447～1537）の『杜詩抄』などが現存している。

またこの時期には、中国の杜詩注釈書（元版）の覆刻も行われた。奈良・天理図書館所蔵『集千家註杜工部詩集』（詩集二十卷・文集二卷）は、宋末元初の文人劉辰翁の集註批点本を元の高崇蘭が編集したものを精確に覆刻したものである。

しかし、これらの《杜甫詩集》も、まだ完全には日本の文化の中に滲透し、熟読されるには至らなかったと思われる。この当時の禅僧（特に京都の代表的寺院の僧侶、これを五山僧という）が最も耽読した中国の詩歌は蘇東坡、そして黄山谷である。彼らが杜甫への関心を喚び起こしたのは、前代の平安文人の読書とは全く関係なく、彼らが尊んだ宋詩人たちの言説を通して改めて再発見したものであった。

しかも、この五山を中心に展開された禅林文化は、15世紀後半に相次いだ京都を含む兵乱（応仁の乱1467～1477等）によって急速に減退してゆく。そして、その中で読まれていた再渡《杜甫詩集》も、やはり人々の記憶から瞬く間に掻き消されていったのである。

ちなみに、この時代の特徴的な杜甫受容の一つに絵画（画賛）がある。日本の遣明使船で中国に渡り、寧波を中心に中国江南の画風を学んだ雪舟等楊（1420～1506）の作品中に「杜甫騎驢図」という画題がある。もとよりこの画題は雪舟の独創ではなく、当時明代の中国において盛んに描かれていたのであるのだが、この画題はその後17世紀以降の日本では殆ど描かれることが無かった。あるいは、この雪舟の画などを粉本として一部の好事家によって描かれても、その画中の人物が詩人杜甫であると認識されることは無かったのである。⁽¹⁾ 私はここにも、日本の杜詩受容史における看過できない断層を認めたいと思う。過去の日本において、詩人杜甫は“二度”忘れ去られたのである。

3. 17～18世紀：三渡《杜甫詩集》と明代古文辞派の詩学

日本で本格的に杜甫詩が読まれるのは17世紀以降の江戸時代である。そして、それは前代の平安抄本からでも、室町の五山版からのものでもなく、明

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

万暦期に福建で刻された小さな一選集から始まったものであった。

邵傳（字夢弼）撰、明万暦十六年（1588）陳学楽（字以成）序刊『杜律集解』六巻は、五言律詩388首（四巻）と七言律詩135首（二巻）とで構成された極めて簡略な小選集である。この原刻本は現在の中国では殆ど残されていない。しかし、この小冊は日本に伝来され、まず京都の書肆風月宗智が訓読（和訓）を施して出版（1643年・日本寛永20年）されるやいなや、一気に流行し、その後約半世紀に涉って多くの覆刻本および各種の増訂本が出されたのである。今、私が日本各地の図書館に所蔵される『杜律集解』を調査したところ、少なくとも以下の十数種の版本が確認された。

(0) 明刊本……………明万暦16年刊本 国立公文書館・国会図書館所蔵

(1) 寛永20年（1643）京都・風月宗智刊本

東洋文庫・国会・東北大・九州大等

(2) 万治2年（1659）京都・丸屋莊三郎刊本 二松学舎大等

▲ほかに万治3年刊本・田中庄兵衛覆刻本などもある。

(3) 万治2年（1659）京都・前川茂右衛門刊本 九州大

(4) 寛文5年（1665）上村次郎右衛門刊本（小本） 九州大

(5) 寛文5年（1665）書肆不明。書名『杜律集解大全』12巻

立命館大

(6) 寛文10年（1670）丸屋莊三郎刊本（鼈頭注本） 東北大等

▲ほかに前川茂右衛門刊本（鼈頭注本）もある。九州大

(7) 寛文13年（1673）油屋市郎右衛門刊本 滋賀大・東北大等

(8) 天和3年（1683）書肆不明（旁訓本） 宮城県立図書館

(9) 貞享2年（1685）井上忠兵衛刊本（新版改正…）

▲ほかに書肆無記名本もある。国会・九州大等

(10) 貞享3年（1686）京都西村市郎兵衛・江戸西村半兵衛刊本

二松学舎大等

- (11) 元禄7年(1694) 西村市郎右衛門刊本(音註…) 広島大
(12) 元禄9年(1696) 美濃屋彦兵衛刊本(鼈頭増廣…) 各地多数
▲『杜律集解詳説』無刊記(和訓本) 九州大

このように17世紀後半に爆発的に起こった杜詩熱は、いったい何処から起こったものであろうか？これは明らかに明代後半期の中国詩学、即ち李攀龍(1514~1570)や王世貞(1526~1590)ら後七子たちが提唱した古文辞派の言説に基づくものであろう。いや、最初に明刊『杜律集解』を手を取った京都の書店主たちは、その背景にある明代詩学をいまだ十分には咀嚼していなかったかもしれない。しかし邵傳『杜律集解』の功績は、その簡便な注釈態度にある。宋元時代に蓄積された膨大かつ繁雑な古注釈の一掃——これは明らかに古文辞派の考え方に則したものである。また、そこに選り取られた作品が、初学者にも理解しやすい律詩のみが選ばれていることも流行の大きな一因であろう。そしてそれが厚くもなく薄くもない6巻という分量で印刷されたことが、新しい時代の新しい読者(貴族でもなく、僧侶・文人でもなく、中下級の士人、そして更には一般庶民)を獲得する上で、決定的な要因となったのである。

なお、この当時の日本人は、中国語は解さないが、『論語』や『史記』などの古文は読み解くことができた。訓読の文化が広く定着したからである。従って、杜甫の詩を読むに当たっても、和訓さえ付けられていれば、宋代の膨大な注釈(出典や用例を示し、訓詁を確定する注釈)は不必要であった。もちろん、一部の専門家たちを除いて。

従って、後世の中国では殆ど顧みられることの無いこの通俗的な閩本が、却って日本の一般読者には、まことに最適な入門書となり得たのである。

もう一つ、この『杜律集解』が流行した背景を考えておきたい。それは「科挙」の不存在である。中国において、かくも膨大で多種多様な杜詩注釈書が編集されたのは、科挙受験生の参考書としての役割が大きい。しかし、結局日本に科挙は導入され無かった。そのため、宋元時代の百家を超える杜詩注

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

積のそれぞれを、日本人は熟読する必要は無かったのである。やがて明代に至り、万曆以降の中国庶民文化拡大の中で「科挙」とは関係が希薄な一般子女のための幼学書的な古文学習書が生まれた時、それは日本人にも大いに歓迎される場所となったのである。

ちなみに18世紀以降も杜甫詩は読み続けられた。上記『杜律集解』の版刻が17世紀末で終わっているのは、それ以降、『集解』に代わる新たな書物が歓迎されたためである。即ち、やはり明代の通俗書に数えられる李攀龍撰『唐詩選』である。この一書の日本での盛行は今日まで続いており、日本通の皆さんならば周知のことだと思うのでここでは述べない。

*

日本近世の文化形成の中で、さまざまに強い影響を与えたのが明代の文化である。『杜律集解』の流行がその第一の潮流であったが、その後、日本では更に独自の杜詩選集が編集されるようになる。日本正徳四年（1714）度会末茂撰『杜律評叢』三巻という極めて面白い一書がある。京都の書肆奎文堂瀬尾源兵衛が出版。この書物は杜甫の七言律詩133首を選び、その各詩に関連する評釈を集成したものである。引用されているのは『瀛奎律髓』、『石林詩話』、『詩藪』、『藝苑卮言』、『氷川詩式』など宋明の詩話や筆記類である。当時の日本にはこれらの随筆類も伝来しており、その幾つかは日本でも覆刻されている。度会末茂はそれらを丹念に読破し、このような評釈を独自に編集したのである。

またこの一年前、正徳三年（1713）同じく京都の書肆白松堂唐本屋佐兵衛が出版した書物に『杜律詩話』二巻がある。著者は清初の大儒陳廷敬（1639～1712）で、門人林佶が編集。該書の興味深い点は中国ではこのように単行化して出版されなかったことである。陳の全集『午亭文編』五〇巻の末尾二巻（第49～50巻）から該書を独立させ、これに和訓を施したのは、京都の市井の文人松岡玄達（1672～1746）であった。しかも『午亭文編』五〇巻の出

版は康熙47年（1708）。それが何時長崎に舶来したのかが不明であるが、僅か五年の後に異国の読者を得ているとは廷敬自身予想だにできなかったことであろう。松岡玄達は京都に住む医者であるという。しかし、かくも高い関心を得たのは、やはり『杜律集解』の流行が然らしめた結果であるだろう。⁽²⁾

この他にも幾つかの《杜甫詩集》和刻本がこれに前後して出版されているが、ここでは省略する。ただし特記しておきたいのは、この当時、既に中国では杜甫詩注の集大成とも言える仇兆鰲『杜詩詳注』二五卷（1714年刊）や浦起龍『読杜心解』六卷（1725年刊）が完成されようとしていたが、これら大全集に対して日本の書肆は全く関心を示さず、以後も覆刻を試みようとしていないことである。もちろんこれらの全集原本も中国で出版されると間もなく日本に舶来していた。しかし、これらは一部の専門家や有力な大名が購入するのみであり、その部数は輸入書の部数のみでまかなえたのであろう。

やがて19世紀。こんどは乾隆帝の侍読であった沈徳潜（1673～1769）の『杜詩偶評』四巻が和刻される（原刊は乾隆12年1747序刊）。第一次覆刻は享和三年（1803）江戸幕府の官学である昌平黌で出版（更にその再覆刻も多数存在する）。また紀年が判明する第二次覆刻は文化六年（1809）江戸の千鍾房須原屋茂兵衛刊。第三次は文政六年（1823）江戸の堀野屋儀助、岡田屋嘉七の共同出版。そして明治に至り、書名を『杜詩評鈔』と改め鼈頭注を付けたものが、京都文求堂田中治兵衛から出版されている（明治30年1897）。この沈徳潜の評釈本は、和刻本においても和訓が追加されていない。日本の漢文読解力が向上し、和訓点の無いものでも堂々と出版されるようになったのである。

かくして日本における杜詩は、明清詩学の助力によって、中国の代表的な古典の一つとして認知されるようになったのである。

4. 結語：近代文藝と《杜甫詩集》

以上、日本における《杜甫詩集》閲読の歴史を概述した。最後に明治維新（1868）以降の杜詩受容についても触れておこう。

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

近代日本において、《杜甫詩集》はもはや確固たる地位を占めるに至り、更にさまざまな評釈や概説書が生み出されたが、その出版された書物を眺めてみると、実に多種多様な専門家が参加していることに気がつく。近代詩の詩人（島崎藤村1872～1943）や小説家（堀達雄1904～1953）、画家（小杉放庵1881～1964）、和歌の歌人（土岐善麿1885～1980）、そして英文学者（齋藤勇1887～1982）、法文学者（桑原武夫1904～1988）、独文学者（田木繁1907～1995）など西洋文学の専門家にも杜甫についての専論や重要な著作が見られる。⁽³⁾ 近代日本において杜甫は、西洋文学を理解する上でも重要な役割を果たしたと言えるのだが、このような多種多様な読者を獲得し、彼らに多くの刺戟を与えることができたのも、明清の詩学において杜甫詩がさまざまに論評されてきたことに淵源があると言える。明清詩学の成果は、杜詩を媒介として、東洋における近代文藝の理解にも重要な意義を有していたのである。そして、近代日本の中国文学研究は、杜甫を畢生の研究対象とした吉川幸次郎（1904～1980）によって、その方式が確立された。その後の日本の中国文学研究については、もはや改めて紹介するまでもない。

注

- (1) ちなみにこの「杜甫騎驢図」が日本に定着しなかった背景には、特別な理由もある。古来、日本には家畜として驢馬を飼育する習慣が無く、驢馬が存在しなかった。彼らが驢馬を描くことは著しく困難だったのである。

日本において江戸時代まで驢馬を飼う習慣が無かったことは、宮崎安貞『農業全書』に述べられている（加茂儀一『家畜文化史』改造社、1937年参照）。

- (2) なお『杜律詩話』巻頭には伊藤東涯（1670～1736）による序文が見える。我が国の《杜甫詩集》閲読史を概観する本文もこれを大いに参考にした。

伊藤東涯『杜律詩話序』

本朝廷天以還、薦紳言詩者、多模白傳、戸誦人習、尸而祝之。降及建元之後、叢林之徒、兄玉堂而弟豫章、治之殆如治經、解注之繁、幾充棟宇。今也承平百年、文運丕闡、杜詩始盛于世矣。嗚呼、白之穩實、蘇之富贍、黃之奇巧、要亦非可廢者也。然校之杜、則偏霸手段、不可謂之集大成矣。然則詩道之於今日、亦可謂漸于正歟。書舖刊『杜律詩話』、請序。此清相國午亭陳廷敬所著、其書雖略、亦足以補趙邵之闕、爲序。

(正徳癸巳孟夏)

本朝廷天(延喜・天曆すなわち第60代醍醐天皇・第62代村上天皇の御世)以還、薦紳の詩を言ふ者、多く白傳(白樂天)を模し、戸に誦し人びと習ひ、尸し之を祝せるがごとし。降りて建元の後(元弘・建武すなわち南北朝から室町時代にかけて)に及び、叢林の徒(禪僧)、玉堂(蘇東坡)を兄とし豫章(黄山谷)を弟とし、之を治むこと殆ど經を治むるが如し、解注の繁、棟宇に充てるに幾し。今や承平百年、文運丕^{いえいえ}ひに闡け、杜詩は始めて世に盛なり矣。嗚呼、白の穩實、蘇の富贍、黃の奇巧は、要^{かなら}ず亦た廢すべき者に非ざるも、然るに之を杜に校ぶれば、則ち偏霸の手段、之を集大成と謂ふべからざらんや矣。然れば則ち詩道の今日に於けるや、亦た正(正統)に漸すと謂ふべきか。書舖『杜律詩話』を刊し、序を請ふ。此れ清の相國 午亭の陳廷敬が著せる所、其の書は略なりと雖も、亦た以て趙(趙次公)邵(邵傳)の闕を補ふに足れり、序を爲す。

正徳癸巳年1713、孟夏

- (3) 近代日本の杜甫に関する著作については、静永が『杜甫大辞典』(中国・山東教育出版社、2009年)のために執筆した「日本における杜甫研究主要專著および研究者解題」(日本『中唐文学会報』第11号、2004年)および同「補遺」(『中唐文学会報』第12号、2005年)を参照。

【付記】この文章は2010年12月13日香港中文大学で開催された「明清研究的前景国際學術研討会」に静永が招待されて報告したものである。このような

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

機会を与えて下さった張健教授をはじめ香港中文大学中文系の皆さんにあつく御礼を申し上げます。なお以下に陳狷研究員による中国語訳文も併録する。

近世日本《杜甫詩集》閱讀史考

静 永 健

(華譯・九州大学専門研究員 陳狷)

1. 9～10世紀：《杜甫詩集》初傳日本之痕跡

現存《杜甫詩集》傳入日本最原始的資料記錄入唐留學僧圓仁（794-864）留下的《入唐新求聖教目錄》之中。《入唐新求聖教目錄》是圓仁於開成三年（838）至開成四年（839）在揚州所收集的書籍目錄，其中包括了一個二卷本的《杜員外集》。當然，這個卷子本現已不再存世，但我們還是可以大致推測出這是潤州刺史樊晃（大約於大曆5到6年左右在潤州任，即770-771年）所編六卷本《杜工部小集》的轉抄系統本。也就是說，在樊晃編成《杜工部小集》僅僅六十年之後，其轉抄本就已經被傳入了日本，傳播速度之迅速，不能不令人嘆為觀止！

在圓仁之後，我們則可以在十世紀日本平安時代的貴族文人大江維時（888-963）編撰的唐詩佳句集《千載佳句》中找到杜詩傳入日本的確鑿證據。《千載佳句》一共收入了六聯的杜甫佳句，全文如下：

秦城樓閣鶯花裏，漢主山河錦繡中。〔清明〕
林花着雨燕脂落，水荇牽風翠帶長。〔曲江遇雨〕
藍水遠從千澗落，玉山高對兩峯寒。〔（九日）藍田崔氏莊〕
五夜漏聲催曉箭，九天春色醉仙桃。〔早朝大明宮〕
魚吹細浪搖歌扇，燕蹴飛花落舞筵。〔城西（陂）泛舟〕
數莖白髮那拋得，百罰深盃也不辭。〔陪陽傳賀蘭長史會樂遊原〕

通過與現存各種杜集的對校，可知以上詩文及詩題均存在着一些比較明顯

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

的文字異同，例如第六句之《陪陽傳賀蘭長史會樂遊原》，今日通行本作《樂遊園歌》。從時間來看，大江維時編撰《千載佳句》時所使用杜詩底本應該早於現存最早的北宋王洙編集本，因此，其所錄杜甫詩句雖然只有六句，但文獻價值卻不容忽視。此外，再稍後一點，大江維時的後裔大江匡房（1041-1111）還在其言行語錄《江談抄》中提到了一部《注杜工部集》。由此可以看出，在日本的平安時代，杜詩已經的確有了一定範圍的傳播。

然而，我們也不得不承認，杜甫在日本平安時期的貴族文人之中的知名度並不高，最多不過只能算是為數眾多的唐代詩人中的一位而已。他的詩歌也還沒有被平安貴族文人予以特別地讚賞推崇。本來在當時日本能夠有能力且有興趣去廣泛閱讀大量唐詩的貴族文人就極為有限，因此《杜甫詩集》的傳播範圍應該也不會超出平安宮廷貴族的這一文化小沙龍的圈子。

另外，從現有史料來看，可知隨着時間的推移，《杜甫詩集》不但沒有進一步擴大影響，反而逐漸淡出了平安文人的視野，徹底失去了讀者。在煌煌眾多的平安史料之中，沒有留下談及用平安古抄本與北宋王洙以後諸刊本進行對校的任何文字記載，這就是證明平安中後期文人基本沒有關心過杜詩的最好證據。這種冷漠的受容態度與白居易的《白氏文集》恰好相反，可以說是這兩部文集正好可以被看作是東亞漢籍傳播中的截然不同的兩個典型。

由此可知，隨着平安貴族文化的衰退，最早傳入日本的《杜甫詩集》也逐漸退出了歷史的舞臺。杜甫的詩文，宛如神龍一現，就又立即消失得無影無踪了。

2. 14~15世紀：《杜甫詩集》之日本再傳與五山禪林

杜甫的詩文再次出現在日本文人的視野之中，要後推到中國的元末明初，也就是日本的鎌倉末期與室町時代。

在這一時期，杜甫詩歌最初開始流行於一些禪僧，特別是代表了京都禪林寺院的五山僧侶之間。與中國大陸的詩僧一樣，五山僧侶們在佛道修行的同時也熱衷於諷詠漢詩，通過各種“文會”與禪林之外的文人貴族進行詩歌唱和，具有非常高的文學欣賞水平。在享受杜詩的同時，他們往往還從一種禪僧所獨具有的視角來嘗試對杜甫詩文進行詮釋與講義。這些杜詩講義中的一部分隨後

被弟子整理成書，流傳至今。其中比較著名的有江西龍派（1375-1446）的《杜詩續翠抄》、雪嶺永瑾（1447-1537）《杜詩抄》等等。此外，對於杜詩的議論還散見於禪僧們的各類文集之中，如虎關師鍊（1278-1346）的詩文集《濟北集》二十卷之第十一卷中收入的對《登岳陽樓》《已上人茅齋》《別贊上人》《秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻》四首詩的箋注。

也就是在這一時期，日本本土開始對中國大陸所傳杜詩箋注本進行覆刻。現存奈良天理圖書館《集千家注杜工部詩集》（詩集二十卷/文集二卷），可以確認為元時高崇蘭所編纂的宋末元初文人劉辰翁集注批點本之忠實的覆刻本。但儘管杜詩以及《杜甫詩集》的傳播已經有了一定的規模，但我們還是有必要認識到，這一時期對杜詩仍然沒有像白居易詩文一樣被吸收融入到日本文化之中。其實，即使是在五山禪僧之中，最受歡迎的還是蘇東坡與黃山谷，而非杜甫。而且我們還必須進一步清楚地認識到，此一時期對杜甫詩的關心並非源於杜甫詩歌本身的魅力，亦與之前平安文人對杜詩享受無甚關聯，只是五山禪林宋詩崇拜的一個間接的產物。說明白一點，五山禪林對杜甫詩歌的認識不外是建立在蘇黃等宋代大詩人對杜詩的評論之上，屬於一種愛屋及烏的現象。且以五山為中心的禪林文化本身也並沒有延續多久，到了十五世紀後半期，因為連綿不斷的戰亂（諸如1467-1477年的應仁之亂），其文化也迅速走向衰退，不久就退出了歷史舞臺。同時，由五山禪僧所傳來的《杜甫詩集》，也再次淡出了人們的閱讀視野。

另外，這一時期的杜詩享受還有一個非常獨特的地方，就是杜甫形象曾一度出现在了日本繪畫（畫贊）之中。與日本遣明使一起入明，繼承了以寧波為中心的大陸江南一帶畫風的雪舟等楊（1420-1506）的作品目錄中有一幅題為《杜甫騎驢圖》的繪畫。這種以杜甫騎驢為題材的繪畫不可能完全出於雪舟的獨創，應該是對大陸江南繪畫的一個繼承。不過，從現有史料來看，這個畫題在十七世紀以後的日本文人繪畫之中基本沒有得到因襲。當然，雪舟的這幅畫其後並不乏有好事者予以模擬，但有趣的是，這些模仿之人卻基本上都沒有將畫中之人與杜甫聯繫起來。由此也可以看出，五山文化退潮之後杜甫知名度在日本文化階層中基本降到了冰點，幾可戲稱之為日本杜詩受容的第二個的冰凍

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

期。杜甫有幸兩次進入日本的主流文化，但不幸的是兩次都沒能逃脫被遺忘的悲劇命運。

再附言一句，《杜甫騎驢圖》之所以沒有能夠在日本札下根來，極有可能還與一些看似與文化傳播本身無關的外在因素有着比較密切的聯繫。日本自古以來就沒有飼養驢馬的習慣，因此日本本土文人基本上沒有見過驢馬的實際形象，也就談不上將其演變為繪畫的一個主要題材了。

3. 17~18世紀：《杜甫詩集》之第三次傳入日本與明代古文辭派的詩學

可以說，直到十七世紀以後的江戶時代，杜詩在日本才真正地得到廣泛的閱讀與受容。不過出人意外的是，直接導致杜詩大流行的，不是平安時期的古抄本，也不是室町時期的五山版本，竟然是明萬曆年間刊刻於福建的一部不起眼的杜詩通俗選本！

邵傳（字夢弼）撰，明萬曆十六年（1588）陳學樂（字以成）序刊六卷本《杜律集解》，是一部由388首五言律詩（四卷）與135首七言律詩（二卷）構成的杜詩選集，註釋極為簡潔，在中國大陸現在已經基本上找不到此書的原本了。然而，正是這部分量不重的小書，被京都書肆風月宗智加以訓讀（和訓）出版（1643年・日本寬永20年）之後，如燎原之火，立即成為了當時的一大暢銷書。在此後的半個世紀之中，又不斷有各種覆刻本以及增訂本問世。以下是我對日本各個機關圖書館所調查的《杜律集解》的部分版本目錄，附於下，以供大家參考：

(0) 明刊本……明萬曆16年刊本 國立公文書館・國會圖書館所藏

(1) 寬永20年（1643）京都・風月宗智刊本

東洋文庫・國會・東北大・九州大等

(2) 萬治2年（1659）京都・丸屋莊三郎刊本 二松學舎大等

▲另有萬治3年刊本，田中庄兵衛覆刻本。

(3) 萬治2年（1659）京都・前川茂右衛門刊本 九州大

- (4) 寛文5年(1665) 上村次郎右衛門刊本(小本) 九州大
- (5) 寛文5年(1665) 書肆不明。書名《杜律集解大全》12卷
立命館大
- (6) 寛文10年(1670) 丸屋莊三郎刊本(鼈頭注本) 東北大等
▲另有前川茂右衛門刊本(鼈頭注本)。 九州大
- (7) 寛文13年(1673) 油屋市郎右衛門刊本 滋賀大・東北大等
- (8) 天和3年(1683) 書肆不明(旁訓本) 宮城縣立圖書館
- (9) 貞享2年(1685) 井上忠兵衛刊本(新版改正…) 國會・九州大等
▲另有書肆無記名本。
- (10) 貞享3年(1686) 京都西村市郎兵衛・江戸西村半兵衛刊本
二松學舎大等
- (11) 元禄7年(1694) 西村市郎右衛門刊本(音註…) 廣島大
- (12) 元禄9年(1696) 美濃屋彦兵衛刊本(鼈頭增廣…) 各地多數
▲《杜律集解詳説》無刊記(和訓本) 九州大

那麼，爲何日本十七世紀後半期杜詩能風靡整個江戶呢？我想，其最根本原因還是要將其歸溯到明代後期中國詩學思想的嬗變，即以李攀龍（1514-1570）、王世貞（1526-1590）等爲代表所提倡的古文辭派思想的流行。也許最初看到明版《杜律集解》的京都書肆店主並沒有過分在意到這部書的詩學背景，但邵傳在編撰此書時，一掃宋元時代積累下來的繁雜而難估的舊注，這明顯就是在古文辭派思想影響之下而形成的一種新的文學觀。在這部小書之中，邵傳有意選取了一大批初學者比較容易理解的律詩並附以簡單的註釋，使得其易懂好讀。更重要的是，這一時代的日本人雖然不懂中國語，但訓讀文化的確立，已經逐漸使得一般的市民階層也已經開始能夠讀懂諸如《論語》《史記》這類經典的古文作品，漢籍的需求市場（這一時期的書籍主要受容階層，不是貴族，亦非僧侶，已經擴大到了中下階層的士人以及一般的庶民）得到了明顯的擴大。在日本出版的杜甫詩集之中，也毫無例外的被附上了和訓，也正是爲了迎合這一龐大讀者群體的需要。而《杜律集解》六卷本這種不多不少的分量，價廉物美，

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

又正暗合了普通讀者層的價格要求！也就是說，如果不是專門或特別愛好杜詩的學者，已經失去了究讀數量繁多的宋元古注（出典、語例以及訓詁）之必要了。一般的讀者，完全可以通過簡單的和訓來對杜甫的詩歌進行自由的享受。要之，這部在中國大陸基本上沒有引起多大反響的閩本杜詩集，之所以能在日本成爲風靡一時的一大暢銷書。乃是因爲被加上了簡單的和訓符號的《杜律集解》覆刻本，正趕上了十七世紀後期日本的這一時期文化轉型的時代潮流。因爲《杜律集解》的流行，杜甫也因此一躍爲這一時期的一個文化偶像，終於在日本知識階層中得到了一定的地位。

另外，《杜甫詩集》會在中國與日本呈現出如此不同的受容面貌，還有一個重要原因就是與日本沒有實行科舉制度不無關聯。中國之所以會編撰出如此數量繁多的杜詩箋注，其中很大的一部份是被當作科舉士人的參考書。而在日本，科舉制度本身並不存在，日本人也就完全沒有必要對宋元時代超過百家之多的杜詩箋注予以關心，因此難懂的杜詩也就很難在日本得到流行。直到明代萬曆之後，在中國大陸庶民文化得到進一步擴張的文化背景之中，開始出現了一批直接與科舉考試本身沒有多大聯繫，爲一般庶民家庭之幼學兒童的古文學習課本，而這些通俗易懂的古文讀本也迅速地傳入了日本得以流行。和刻本《杜律集解》在日本的濫觴與這一時代東亞漢文化圈的大背景亦有密切的聯繫。

然而，有花開就有花落，雖然杜詩在十八世紀以後依舊受到日本讀者的歡迎，但《杜律集解》之出版風潮卻在十七世紀末落下了帷幕，這是因爲李攀龍《唐詩選》的傳入日本，一躍成爲日本閱讀唐詩時最權威的選本。《唐詩選》對日本近世影響之深遠已是一個衆人周知的事實了，相關研究甚多，於此就不再贅言了。

明代文化對於日本近世文化的形成產生過巨大的影響。本文所提到的《杜律集解》只不過是其第一波浪潮的肇端。沿襲着這股潮流日本之後還相繼出現了不少本土編撰的杜詩選本。日本正德四年（1714）度會末茂撰《杜律評叢》三卷就是其中最有一特色的一本。這部書是由京都書肆奎文堂瀨尾源兵衛出版發行，選入了133首杜甫的七言律詩以及相關匯評，大量引用了《瀛奎律髓》《石林詩話》《詩藪》《藝苑卮言》《冰川詩式》等宋明詩話筆記中的記載。由

此可知當時日本還傳入了大量的宋明隨筆書籍，其中一部分還被日本書肆予以了覆刻。度會末茂對以這些隨筆書籍予以了通讀，匯集其中有關杜詩的評論，從而編撰出這部獨具特色的《杜律評叢》。

此外，在《杜律評叢》刊刻的一年之前，京都書肆白松堂唐本屋佐兵衛還出版了一部二卷本的《杜律詩話》。《杜律詩話》的作者為清初大儒陳廷敬（1639-1712），由其門人林佶最終匯總而成。非常有趣的是，這部書在中國大陸並沒有被單行版刻。日本出版的《杜律詩話》，是京都市井文人松岡玄達（1672-1746）將陳廷敬全集《午亭文編》五十卷之該當部分之最末二卷抽出加上和訓編纂而成的。《午亭文編》刊刻於清康熙47年（1708），現在還不清楚這部書籍是何時被舶到長崎的。但此書在出版之短短五年之後就已經受到了日本文人的矚目，估計這是陳廷敬本人不曾想到過的吧！還要強調一點的是，松岡玄達並非專業文人，其本職乃是醫生，他從《午亭文編》將《杜律詩話》抽出編輯成和刻本，這無疑是證明這一時代杜詩流行之廣、影響之深遠的最好的一則證例。

此外，在這一時期日本還先後出版了好幾部和刻《杜甫詩集》，此處就不再一一枚舉。但要引起我們注意的是，此時中國大陸已經出版了被譽為杜甫詩注集大成的仇兆鰲二十五卷本《杜詩詳注》（1714年刊）及浦起龍六卷本《讀杜心解》（1725年刊），然而日本的書肆卻對這兩部大著沒有顯示出任何興趣，這兩部詩集最終也沒能在日本得到翻刻刊行。當然，我們不否認這兩部書籍在中國大陸出版不久之後就已經舶至日本，但是其傳播範圍極為狹窄，數量也極為有限，只限流傳於一部分有名的藏書家以及學者之中。

十九世紀初，乾隆帝之侍讀沈德潛（1673~1769）所編撰的四卷本《杜詩偶評》被覆刻成了和刻本（底本為乾隆十二/1747年序本）。第一次覆刻於享和三年（1803），由江戶幕府之官學昌平覺刻版刊行（此後又出現了不少此本之再覆刻本）。第二次覆刻於文化六年（1809），由江戶千鍾房須原屋茂兵衛刊行。第三次覆刻於文政六年（1823），由江戶的堀野屋儀助與岡田屋嘉七共同出版。直到明治時期，這部書還被改名為《杜詩評鈔》附上鼈頭注被京都文求堂田中治兵衛再次刊刻（明治30年/1897）。與以往的和刻《杜詩詩集》不一樣，沈德潛編撰的這部《杜詩偶評》並沒有被附加上和訓。由此可以看出此時日本人的

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

漢文讀解水平已經達到了一個非常高的水準了，即使是中低階層的知識分子，也不用借助和訓來閱讀欣賞杜詩了。

如上所述，日本的杜詩傳播，一波三折，最終還是借助了明清詩學思想之濫觴，才終於在日本確立了其作為中國古典文學之代表的經典地位。

4. 結語：近代文藝與《杜甫詩集》

上文對日本杜甫受容及閱讀史做了一個簡單的概括與回顧。最後，讓我再來談談明治維新（1868）以後日本近代知識分子對杜詩受容的情況。

時至近代日本，可以說杜詩已經佔據了東亞漢文學鰲頭之經典地位，因此有關杜詩的各種評注以及概說的書籍還不斷地在日本被刊刻出版，參與這項活動的知識分子也覆蓋了各個層面。如近代詩詩人之島崎藤村（1872～1943）、小說家之堀達雄（1904～1953）、畫家之小杉放庵（1881～1964）、和歌歌人之土岐善麿（1885～1980）等，都留下了不少有關杜詩的論著。甚至連當時的一些著名的西洋文學大家，如英文學之齋藤勇（1887～1982）、法文學者之桑原武夫（1904～1988）、獨文學者之田木繁（1907～1995）亦都涉及到了之一領域。可以看出，近代日本之杜詩，在幫助日本知識分子理解，審視西洋文學這異文化接受的方面也發揮出了巨大的作用。或許正因如此，即使是在西風東漸的明治時期，杜詩在日本還是擁有着一大批忠實的讀者。

衆而言之，在明治時期，杜詩已經不再是純粹的唐詩，而是被看成為明清詩學之集大成的一個重要象徵。借助對杜詩的論評，明清詩學之精華也得到了進一步深化傳播，對日本近代知識分子學術思想的形成以及文藝創作具有不可忽視的重要意義。正是在這種學術思潮的影響下，以畢生研究杜詩為大任的古川幸次郎（1904-1980），開創了日本的中國文學學科，也確立了日本研究中國文學獨自的學術傳承。對於這一問題，請允許我撰別稿予以詳談。

參考：伊藤東涯（1670～1736）《杜律詩話序》：

本朝廷天以還，薦紳言詩者，多模白傅，戶誦人習，尸而祝之。降及建元之後，叢林之徒，兄玉堂而弟豫章，治之殆如治經，解注之繁，幾充棟宇。今也

近世日本で読まれた《杜甫詩集》について

承平百年，文運丕闡，杜詩始盛于世矣。嗚呼，白之穩實，蘇之富贍，黃之奇巧，要亦非可廢者也。然校之杜，則偏霸手段，不可謂之集大成矣。然則詩道之於今日，亦可謂漸于正歟。書舖刊《杜律詩話》，請序。此清相國午亭陳廷敬所著，其書雖略，亦足以補趙邵之闕，爲序。(正德癸巳1713孟夏)

